

講演 1

韓国における保険市場の環境変化と
保険会社のリスクマネジメント

保険研究院（韓国）院長 Khang, Ho



○司会者（中出） それでは、講演に移りますが、韓国の保険研究院の院長をされている Khang, Ho 先生に「韓国における保険市場の環境変化と保険会社のリスクマネジメント」というテーマでお話をいただきます。

まず、保険研究院というものは日本では馴染みがあまりないかもしれませんが、概要の説明をさせていただきます。2008年に設立されて、67名の組織で、そのうち博士号を持っている方が27名といった研究組織であるとのこと。研究院の出資については、生損保の44社が共同で設立しているのですが、内容としては非常に公的な役割が高く、中立的な立場から政府当局に監督や政策の方向、あり方といったものを提示したり、産業の発展のために経営戦略、方向ということについても中立的・客観的な立場から研究の裏づけをもって提示していくとのこと。いわゆるシンクタンクとしての機能と政府の中核的な企画立案能力というものをあわせ持った組織であるといえます。その長でいらっしゃるということになります。

Khang, Ho 先生は、ソウル大学を卒業して、修士も出られた後、アメリカのジョージア大学で保険学専攻で博士号を取得されております。その後、韓国でさまざまな活躍をして、お手元のパンフレットの裏に詳細が書いてあるとおりですが、現在、院長をされています。

Khang 先生は、韓国において、実務も踏まえ、国全体の政策の立案に深く関わっていらっしゃる先生です。本日は韓国の問題をかなり幅広くいろいろなテーマを取り上げてお話をいただくことになっております。

それでは、Khang, Ho 先生、よろしくお願いいたします。

○Khang 皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました Khang, Ho でございます。

本日、日本の保険専門家の皆様方と日本、また韓国の保険産業の懸案につきまして、深く意見を交わす機会を持ちましたこと、非常にうれしく思っております。

また、このような発表の機会を与えてくださいました早稲田大学の関係者の皆様方に感謝申し上げます。とりわけ産業経営研究所の花井所長、またフォーラムのコーディネータでいらっしゃいます李洪茂先生にも深く感謝の言葉を申し上げたいと思います。

（シート1）本日のフォーラムの大きなテーマでございますが、保険会社におけるリスク管理であります。ですので、私が申し上げますテーマも韓国保険市場における環境変化および保険会社のリスク管理でございます。

（シート2）しかしながら、今この場にいらっしゃる皆様方は、韓国保険市場につきましてそ

れほどお詳しくないと伺いました。したがって、韓国経済、また保険市場における概要を先に申し上げ、その後、現在進められております韓国保険市場の主な環境変化、また環境変化による影響、保険会社におけるリスク管理の方向性につきまして申し上げたいと思います。

まず、韓国経済と保険市場における主な特徴について、第一点目、韓国経済および金融市場の規模、二点目、保険市場の規模、三点目、商品および資産の構成、四点目、韓国保険会社の財務健全性といった順番で申し上げたいと思います。

(シート4) 左側にありますグラフでございますけれども、2010年国内総生産を基準にしまして、全世界上位の15の国のGDP規模、また一人当たりの所得をあらわしたものです。韓国の年間総生産でございますけれども、1兆ドル程度でございます。これは、世界で15番目の経済規模でありまして、一人当たりの年間所得は2万ドル前後でございます。また、金融機関が保有しております総金融資産でございますけれども、2013年基準にしまして2兆9000億ドル規模でございます。このうち保険会社が保有している資産が1/4を占めております。

(シート5) 次に、韓国保険市場の保険料の規模を見てみたいと思います。年間収入保険料でございますけれども、1,390億ドルでございます、世界保険市場における3%のシェアを占めております。

また、韓国のGDPに比べまして総体的に高い市場規模を見せておりまして、右側の図をご覧くださいいただければと思いますが、12.1%という非常に高い保険浸透度を見せています。

(シート6) 韓国の主な保険種目でございますけれども、その構成をご覧くださいいただければわかりいただけると思いますが、生命保険におきましては終身保険、変額年金が主なメインを占めております。損害保険におきましては、自動車保険、3年以上の長期保険といった市場で成長を牽引しています。

(シート7) 先ほども申し上げましたように、保険会社が総金融資産の1/4を保有しておりますけれども、そのほとんどの資産は債券を中心にして構成されています。生命保険会社は、総資産の58.6%を債券を中心にした有価証券として保有しています。また、損害保険会社も総資産の51.9%を債券を中心として保有しています。これは、韓国の損害保険会社の主なメイン商品が長期保険でありますので、生命保険も同じような資産構成を見せているからであります。

(シート8) つづきまして、韓国における支払い能力規制について申し上げます。これまでに支払い能力規制は、保険会社の保険金の支払い能力を高め、競争を促進するという方向で進化してきました。韓国の変化は1990年代、2000年代、2010年代と三つの時期に分けて考えることができます。1990年代におきましては、すべての保険会社に画一した金額を担保として要求するという形でなされておりました。事実、この時期におきまして保険会社の健全性の維持は、保険料と資産運用に対する直接規制により多く依存しておりました。

しかしながら、経済危機の後、保険料と投資に対する直接規制を減らし、準備金、また資本に対する間接規制を強化し始めました。この時期に採用されました資本規制が、リスクによって要

求資本も算出する EU ソルベンシー I 形態の支払い余力の規制であります。グローバル金融危機の後、EU 方式からリスクを細分化した RBC 制度に転換して今に至っています。2012 年からは RBC 強化プランを進行中であり、準備金、時価評価を含む IFRS 4 フェーズの施行に備えた準備も行っています。

(シート 9) 韓国の RBC 制度は、日本の制度と類似しております。要求資本の算出の際に、保険会社がさらされている危険を大きく保険、金利、信用、市場、運営といった五つのリスクに分けております。各リスク別の危険額を算出する基準は、バリュー・アット・リスク (VaR) を使用して、測定期間は一年としています。一方、保険、金利など、また総要求資本対比、余剰資本の比率であります RBC 比率 100% が保険会社が遵守しなければならない比率です。したがって、金融監督当局は RBC 比率が 100% に至らない場合には、保険会社に対して経営改善措置を要求し、50% に至らない場合には営業縮小など、経営に直接介入します。

(シート 10) 2013 年 12 月現在、韓国保険会社の RBC 比率を見てみますと、すべての保険会社は最小限 RBC 比率の 100% を超えておりますし、また大多数の保険会社は金融監督当局の勧告レベルであります 150% 以上を維持しています。2013 年 12 月現在、生命保険は 286.3%、損害保険は 261.1% であります。

(シート 11) ここまで韓国の保険産業について紹介いたしました。これからは、韓国保険市場における環境変化によりまして、大きく人口の高齢化、低金利と低成長など経済環境の変化、規制環境の変化に分けて申し上げたいと思います。

人口の高齢化が根本的な変化であるとするならば、それに伴う低金利、また低成長というものは、保険産業をさらに厳しくする、より大きな目に見えるような環境変化であると思います。この規制環境の変化とともに、韓国保険市場におきましては、さらに多くの変化がもたらされるものと予想されます。

(シート 12) まず、規制環境の変化であります。韓国の規制変化は、規制の国際的な整合性の追求とともに、非常に早いスピードで変化しています。韓国は日本と異なりまして、IFRS の全面採択をした国家です。金融危機を経まして、会計の透明性、また、IFRS の採択が当然に思われたからであります。

2018 年を前後にしまして、保険会社の準備金の時価評価の義務づけという大きな変化をもたらすものと予想されます。また、グローバル金融危機の後、G20 を中心として進められております金融市場の安定化、また、そのための IMF などの国際基準遵守に関する評価というものは、監督の規定、また ICP、保険基本原則の一貫性の向上作業としてあらわれています。それに伴いまして、定量評価におきましては RBC 強化プランの進行、また定性評価におきましては、ORSA、つまり内部資本自己評価制度の導入検討作業が行われています。

その結果、韓国保険会社におきましては、強化された RBC 基準を二年以内に満たさなければなりませんし、IFRS 4 フェーズで準備金時価評価に備えまして、早ければ 2018 年までに準備金

を今よりたくさん積み重ねなければならないものと予想しています。

(シート 13) 韓国の経済でございますけれども、今までの高い成長率、また高い金利を期待することができない経済へと変化しています。ご覧のように、韓国の経済成長率は世界の経済成長率よりも高くありません。通貨危機、また金融危機を経過しまして、長期金利の下落という傾向が繰り返されています。

(シート 14) 最後に見てみたい最も根本的な変化というものは、人口の高齢化であります。韓国の人口構造は、三十代から四十代の中間層から高齢層へと早いスピードで移行しています。65 歳以上の人口が全体人口で占めている割合でございますけれども、2000 年には 7 % でありましたが、2012 年現在、11.8 % に増加しました。このようなスピードであるならば、2018 年には高齢者社会に入り、2030 年にはその割合が 24.3 % に達するものと予想されます。

(シート 15) 韓国の人口高齢化の特徴でございますけれども、増加する平均寿命、また世界で最も低い出生率であるといえます。2012 年現在の合計特殊出生率でございますけれども、女性一人当たり 1.3 名にすぎません。一方、平均寿命は 81.4 歳に増加し、また 65 歳の平均余命は 20.1 年へと増加しています。それによりまして、主な先進国とは異なりまして、韓国では将来、生産可能な人口が大幅に減少するものと予想されます。それによって財政負担の増加、また潜在成長率の下落、家計における老後に関する危険というものが総体的に大きくなるといえます。

(シート 16・17) それでは、環境変化の影響について見てみたいと思います。持続的な金利の下落によりまして、保険会社の投資利益率が準備金の負担利率よりも低くなり、逆ざやが拡大しています。右側のグラフに示されています。2000 年以前に販売しました高金利、金利確定型の商品を基にしたグラフです。現在、一部の生命保険会社におきましては、すでに逆ざやを経験しておりますし、こういった低金利が持続する場合には、資本勘定の投資利益で逆ざやを補填することができないという危険が増加するものと思われます。

(シート 18) 逆ざやについて具体的に見てみましょう。2012 年初めをベースに見てみますと、生命保険の保険料積立金の 54 % が金利確定型でした。また、保険料積立金の 35 % に適用される確定金利が 6 % 以上です。一方、投資利益率は 4 % 後半です。その結果、現在一部の生命保険会社は、資本から発生する収益によって逆ざやを埋めている状況です。現在の成長率と金利の水準を仮定しますと、逆ざやの解消に今後十五年以上はかかると思われます。

一方、損害保険会社の長期保険は、大半が金利連動型の商品です。逆ざやの問題は、今はそれほど大きな問題ではありません。しかし、金利連動型の場合も逆ざやの問題は存在します。生命保険と損害保険ともに長期市場金利に近い 3 % 以上の最低保証利率が適用されている商品が全体の金利連動型準備金の 50 % 以上を占めているため、今後逆ざやが発生するおそれがあります。

(シート 19) 金利の下落は、資産と負債が金利に対してどれぐらい敏感か、そのギャップによる資本減少のリスクや金利危険も伴います。保険会社の場合、資産価値が増えることで相対的に負債価値が増えるため、資本が減少することがあります。とりわけ生命保険会社は、金利リスク

がRBCが求める資本の50%以上を占めています。

一方、低金利によって変額保険の需要が大きく増えています。変額保険に適用されている最低保証オプションによって市場リスクも増えています。

(シート20) 韓国の保険会社は、資産と負債のデュレーションのギャップを減らすことで金利リスクに対応してきました。韓国の保険会社は、一方では長期資産の保有を増やして資産のデュレーションを増やしてきました。しかし、韓国の長期物の資産が足りないため、金利連動型の商品の割合を増やす商品構成の変化を通じて、負債のデュレーションを減らすことに注力しています。

(シート21) 次は、低成長が及ぼす影響について見てみましょう。最近、収入保険料が落ち込んでいます。特に生命保険の場合、税制の改革に伴う保険の駆け込み需要を除けば、保険料の増加率は足踏み状態です。韓国経済が低成長経済に差しかかっているからです。結局、既存の商品のポートフォリオでは、保険料の増加は期待できない状況です。そのため、韓国の保険会社は、低成長時代に見合う新しい成長エンジンを探さなければなりません。これは、保険会社にさらに多くのリスクを引き受ける方向で商品の開発を促すことになると思います。

つけ加えますと、人口の高齢化に伴ってリスクも高まりますが、健康保障と所得保障の需要は増えると思われます。その市場が増えるわけです。先ほど申し上げましたように、韓国の人口構造は、中心の年齢帯が35歳から44歳の中高年層に変わっています。人口構造の変化は、主に二十代から五十代をターゲットにして商品を開発、販売してきた保険会社にすでに大きな影響を与えています。変額年金を含む個人年金が保険市場をリードし、次第に年金維持率が改善し、終身年金の選択が増え、それだけ保険会社は長寿リスクにさらにさらされることになると思われます。

(シート22) また、保険需要が健康保障を中心に変わることも保険会社がさらされることになる保険リスクをさらに増大させられると思われます。人口の高齢化によって、保険会社は今まで消極的に引き受けていたリスクをこれからは積極的に引き受け、保険会社の役割に対する社会の要求も大きくなっています。

(シート23) 最後に、規制環境の変化に伴う影響です。韓国は、規制の国際的な整合性を高めるために、2018年、IMF、FSAPの金融安定化プログラムの評価とIFRS 4 フェーズⅡに備えて規制の強化を進めています。

しかし、規制強化の細部の内容はまだ固まっていません。そのため、保険会社がRBCの基準を満たし、準備金の時価評価を行う中で、多くの試行錯誤が懸念されています。保険会社は運営リスクが増えています。それに備えて万全を期する必要があります。

一方、規制が不確実になりますと、保険会社は新しい規制対応に躊躇することになり、規制の推進力も弱まります。

(シート24) 今まで申し上げた環境変化の影響をまとめてみましょう。経済の環境変化、人口高齢化という社会的な環境の変化、規制環境の変化があります。保険会社は、逆ざやや資産と負

債の満期のデスマッチのリスクなど、金利のリスクにさらにさらされています。健康保障や所得保障の需要の増加によって、さらに多くの保険リスクにさらされることになると思います。保険会社は、規制の不確実さにも効果的に対応しなければならないという課題も抱えることになります。

（シート 25）ここからは、リスクに関連して、保険会社のリスク管理について見てみましょう。金利リスクの管理や保険リスクの管理、規制の不確実さへの対応の順に申し上げます。

（シート 26）金利リスクに備えて、保険会社は資産と負債の経済的なデスマッチを減らす必要があります。韓国の保険会社は、長期資産のウエートを拡大してきました。しかし、国内の長期物の市場が足りないため、最近では長期の海外資産の投資も増やしています。

一方、デリバティブ商品や金融再保険など、リスクを減らす手段はありますが、取引コストが高く、複雑なヘッジ会計などの原因によって、これを活用するには多くの制約があります。そのため、現在、韓国の保険会社は資産の構成より商品構成の変化に注力すると思われます。

一方、変額保険の最低保障オプションや金利連動型商品の最低保証利率も、低金利環境で重要なリスク管理の対象となっています。

（シート 27）次は、低成長、高齢化時代に必要な健康保険市場のインフラ構築についてです。国民健康保険がカバーしない自己負担分の保険の標準化、また病院が保険会社に保険金を直接請求する第三者請求制度、健康保険公団と保険会社の間で行われる情報交換などは、保険リスク管理について議論されている主なテーマです。

長寿リスクの管理の必要性も高まっています。大半の年金がまだ積み立て段階にあり、維持率が低いため、韓国の保険市場の長寿リスクは大きくないと思われます。しかし、急激な死亡率の改善や終身保険の年金切り替えへの増加など、長寿リスクが高まる可能性は十分あります。

このような点を考慮しますと、死亡保険や年金の商品構成による自然なヘッジの可能性は不確実な状況です。そのため、資本市場を活用した長寿リスクの管理対策も模索する必要があります。

（シート 28）RBC の強化や IFRS 4 のフェーズⅡが導入されますと、保険会社のリスク管理の必要性はさらに高まると考えられます。しかし、健全性の規制が行われる場合、要求される資本の増加や準備金の増加が予想され、保険会社は RBC 比率の下落に対応する必要があります。RBC 比率の下落は、保険会社にリスクの縮小を求める一方、新しい環境で積極的なリスクを引き受ける必要があります。

また、IFRS 4 のフェーズⅡが適用されると、準備金が増え、保険会社は多くの資本減少に直面することになります。現在、健全性の規制強化プランには、このような影響が総合的に反映されていません。細部の案も確定していないため、規制の不確実さが大きい状況です。そのため、保険会社は規制の不確実さを経営戦略を立てるときに十分考慮する必要があります。

（シート 29）規制変化の方向から説明しますと、国際的に支払い能力の規制変化というのは、ソルベンシー・マージンの規制変化は、保険会社がよりリスクを敏感に反応するように、かつ保

険会社のリスク管理を促す方向に進められています。しかし、財務健全性規制の究極の目標は、保険会社の財務健全性を強化し、どんな場合でもいかなる場合でも保険契約者との約束を守らせることです。そのため、健全性規制の変化は、保険会社が現在の慣行を修正し、新しい制度になれる十分な準備期間を提供し、新しい体制に柔軟に移行できるように設計する必要があります。

また、さまざまなリスク軽減手段を認め、保険会社が変化に対応する手段を設けることも規制プランに反映し、保険会社のアグレッシブな対応を誘導する必要があります。

（シート 30）韓国の保険産業において、リスクや資本管理は日増しに重要になってきました。また、保険会社は将来の市場の不確実さだけでなく、規制の不確実さにも備える必要があります。そのため、保険会社の経営陣は経営の現場と意思決定においてリスクに常に注目して考える必要があります。すべての商品は異なるリスクにさらされているため、保険料はそのリスクによって決まる必要があります。そのため、商品の開発から保険金の支払い審査に及ぶすべてのプロセスにおいて危険をモニタリングし、その結果を商品開発段階から反映するリスク管理が必要です。これは、ERM の概念とつながると思います。

また、リスク調整利益に基づいた成果指標を示し、強いリスク管理文化を定着させる必要があります。また、単なる規制の遵守のレベルを超えて、経営陣がビジョンを示し、リスク管理を率先して改善していく必要があります。

（シート 31）以上をもちまして発表を終わります。私の発表が保険会社のリスク管理に関連して、日本と韓国の保険産業が抱えているさまざまな懸案問題について虚心坦懐に話せるきっかけになることを希望します。ご清聴ありがとうございました。ディスカッションの時間により有益な意見交換が行われることを期待いたします。ありがとうございました。

○司会者 Khang, Ho 先生、どうもありがとうございました。先生のお話の中で、韓国と日本で違うところはいろいろあるものの同じような重要な問題に遭遇して、いろいろな努力をしているということが伝わってくるご講演だったと思います。また、限られた時間の中に示唆に富むいろいろな提言、これからの方向性まで示していただいたお話だったと思います。

Insurance Seminar (Waseda University, 2014.6.27)

Changes in the Korea Insurance Market and their Implications to the Risk Management

Khang, Ho



シート 1

Topics

I . Korean Insurance Market Overview

II. Changes in Insurance Market Environments

III. Impact of the Changes

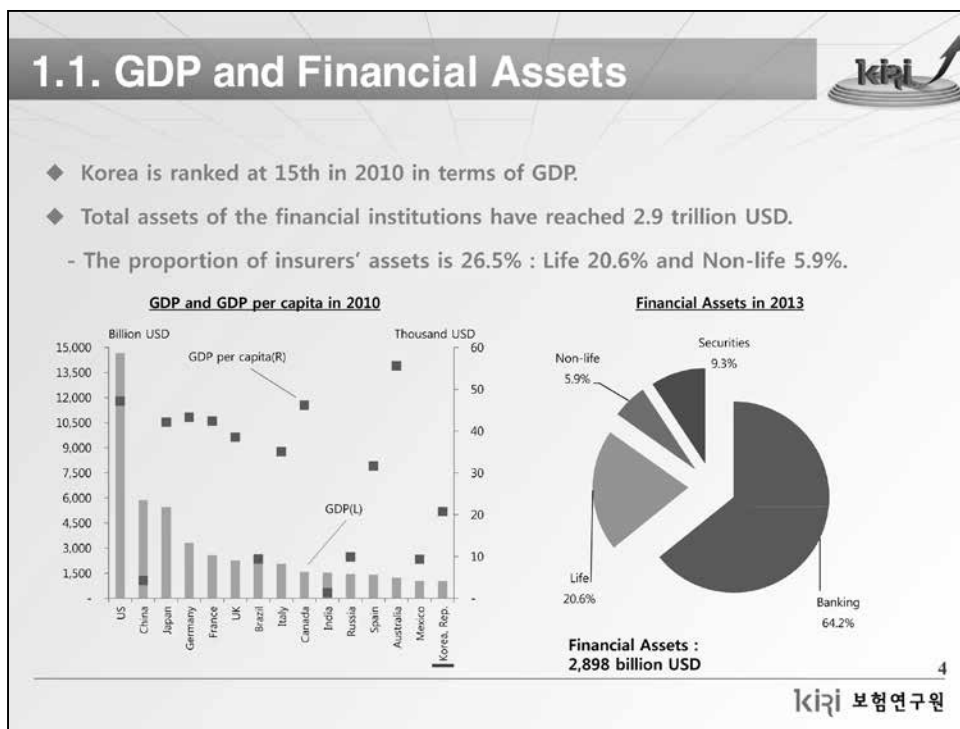
IV. Risk Management in Insurance



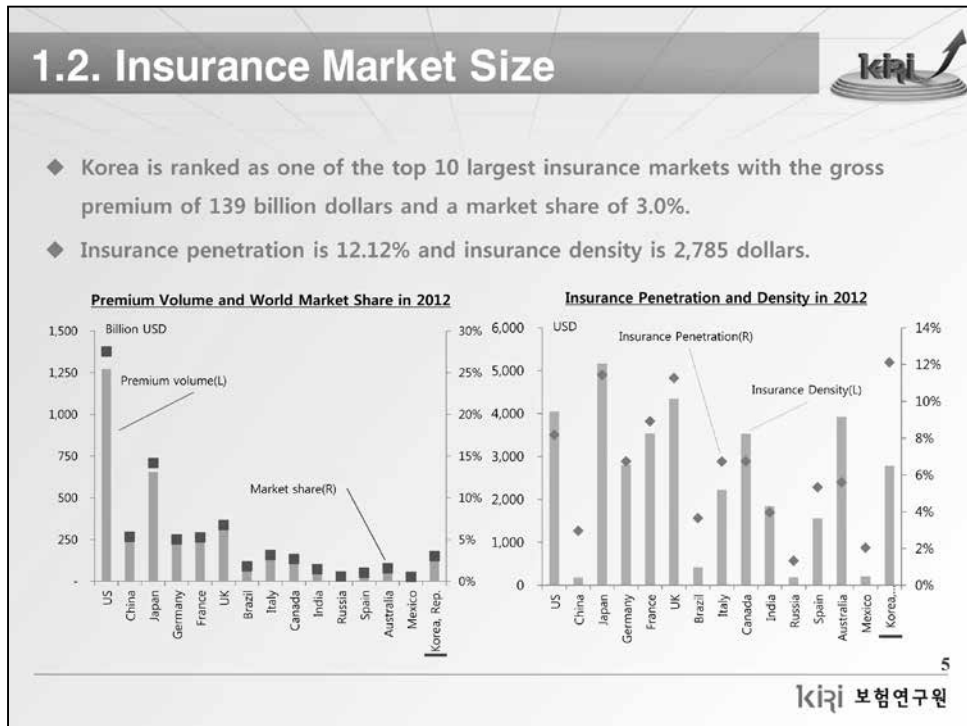
シート 2



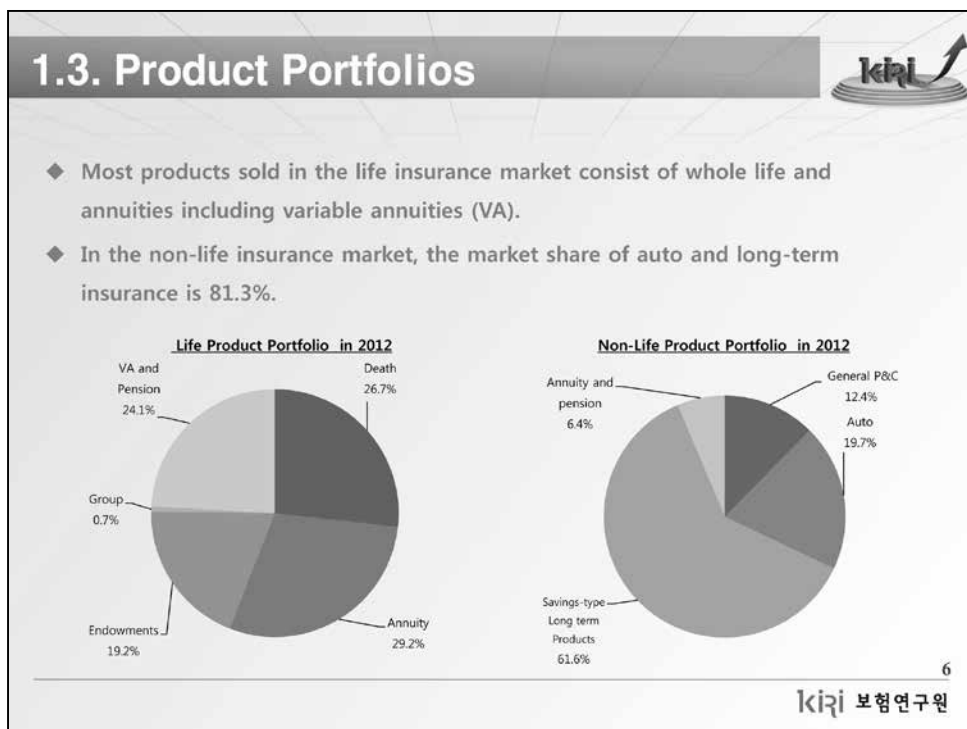
シート 3



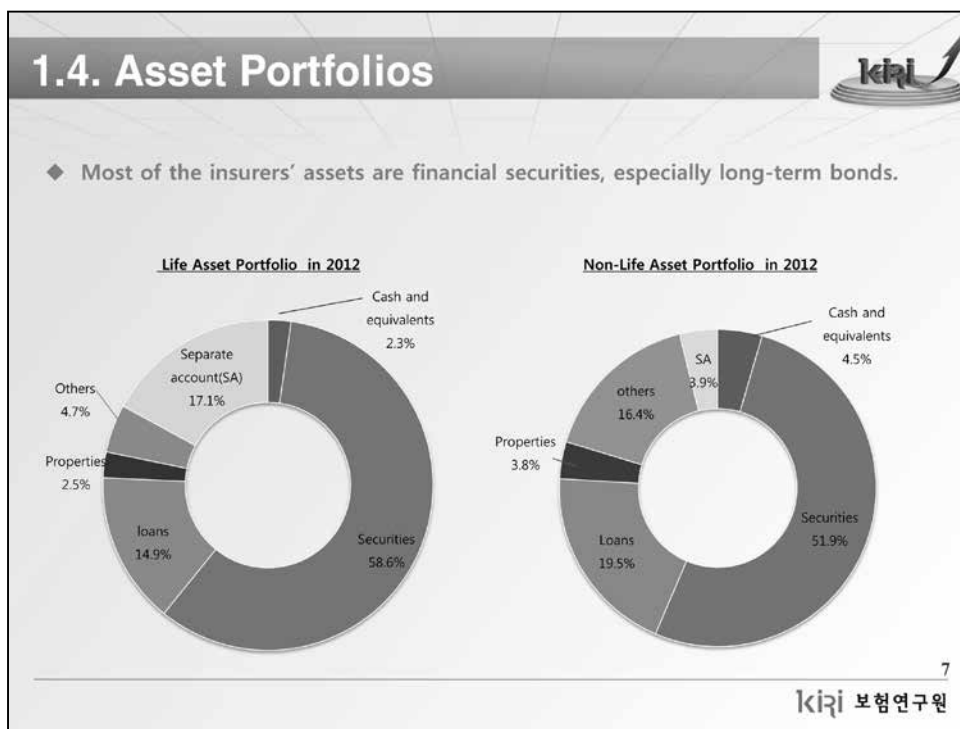
シート 4



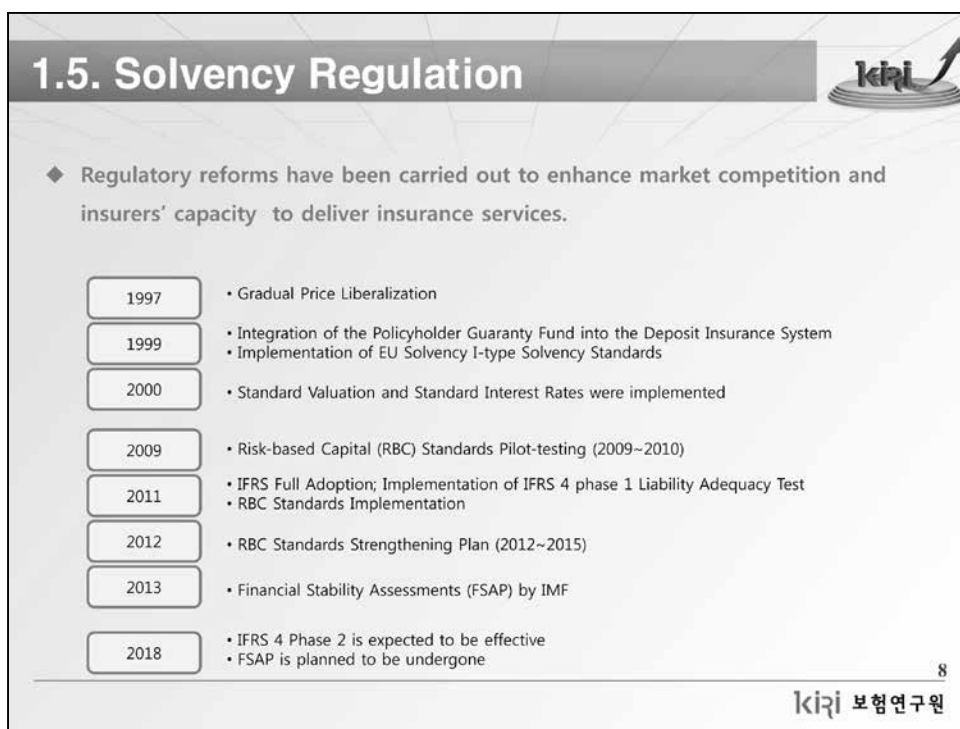
シート 5



シート 6



シート 7



シート 8

1.5.1. Risk-based Capital (RBC)



◆ RBC is a standard factor-based risk capital requirements.

- 5 top level risk categories : insurance, interest rate, credit, market, operational risks
- Risk measure is Value at Risk (VaR) based on 95% confidence level over one year
- Top level risk charges are combined with the square root rule.



9

KIRI 보험연구원

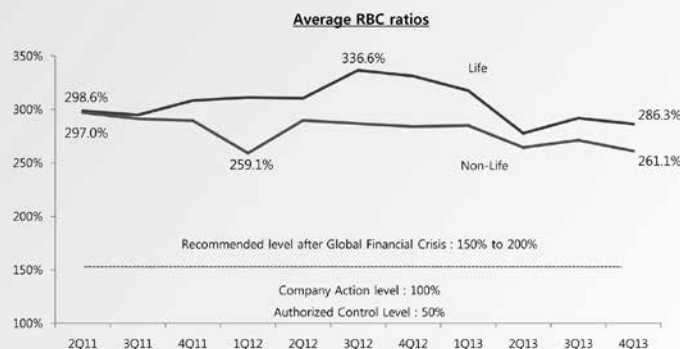
シート 9

1.5.2. RBC ratios



◆ The average RBC ratios in the Korea insurance industry are above 200%.

- Life insurance industry : 286.3%
- Non-life insurance industry : 261.1%



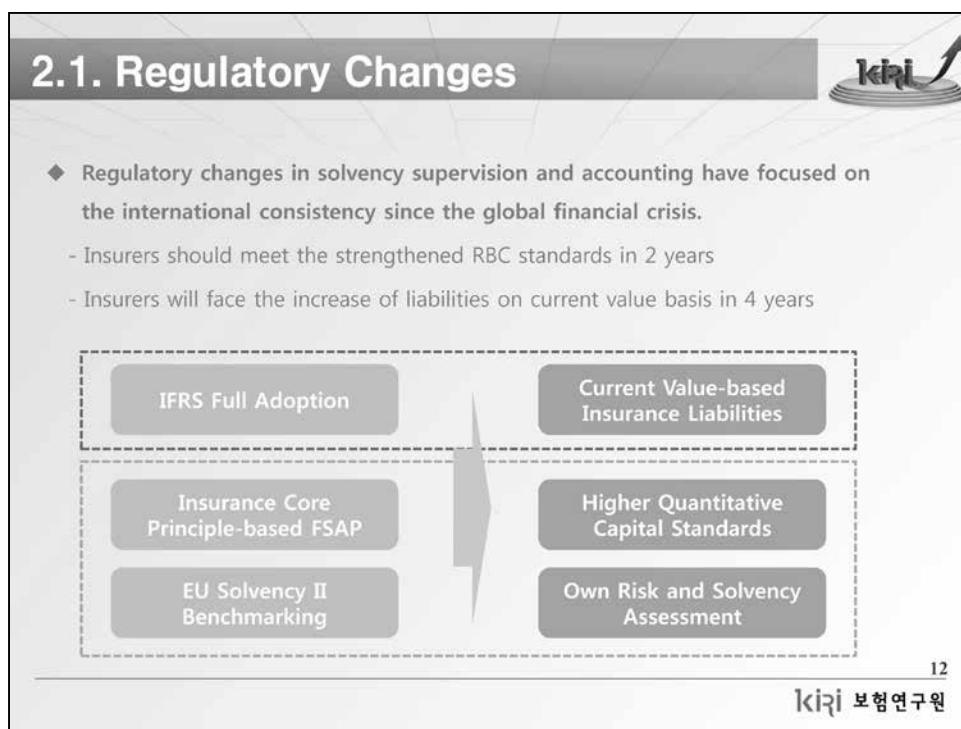
10

KIRI 보험연구원

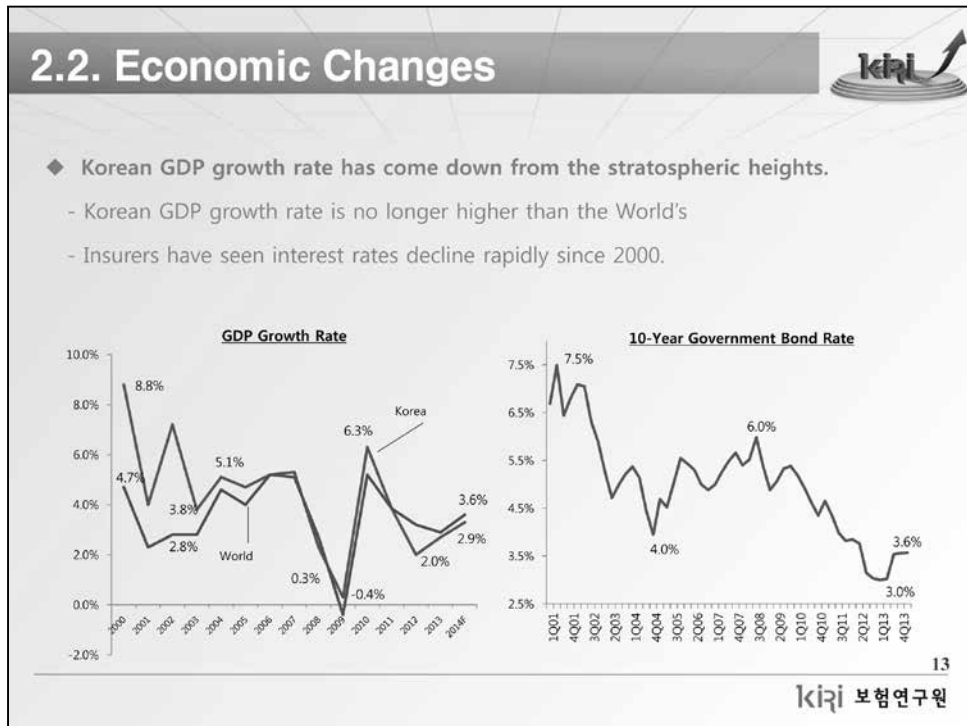
シート 10



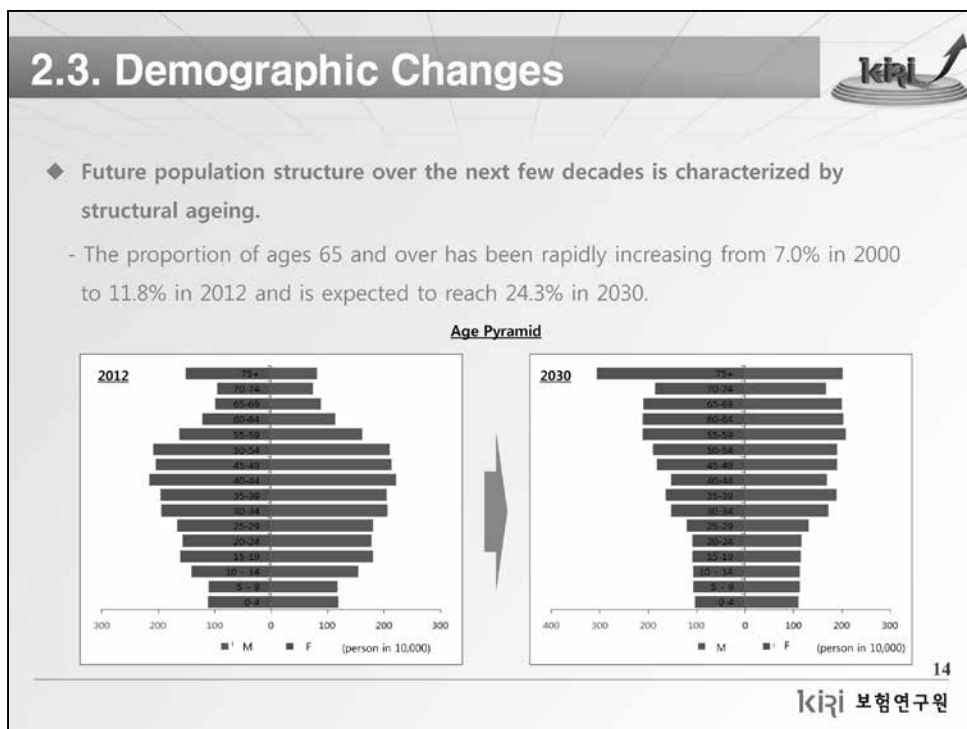
シート 11



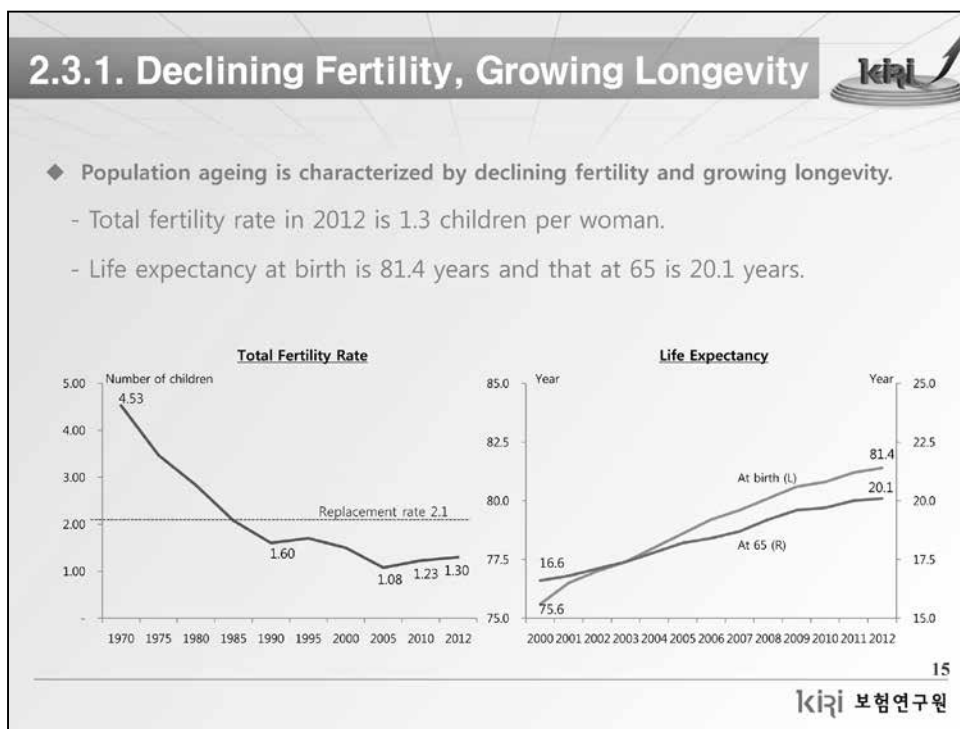
シート 12



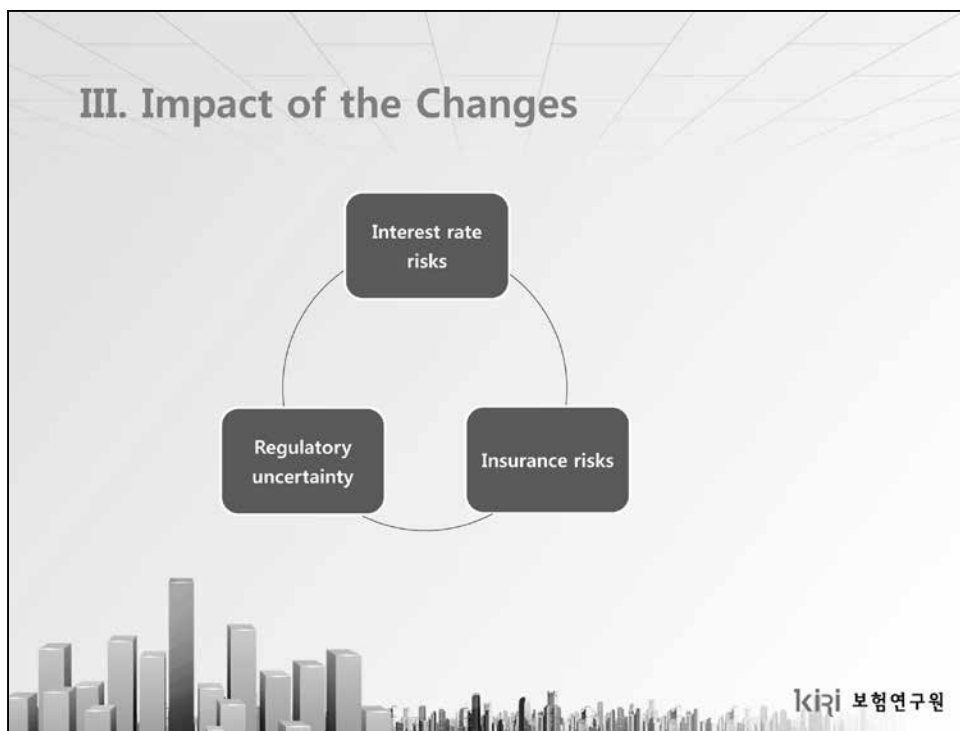
シート 13



シート 14



シート 15

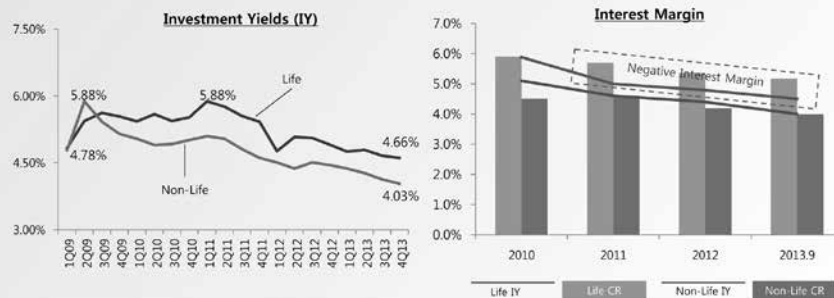


シート 16

3.1. Negative Interest Margin Risk



- ◆ Investment yields have declined below crediting interest rates as the era of low interest rates prolongs.
- Some life insurers are experiencing negative interest margins.
- Insurers are more exposed to the risk that negative interest margins would not be covered by the investment profits of equity accounts.



17

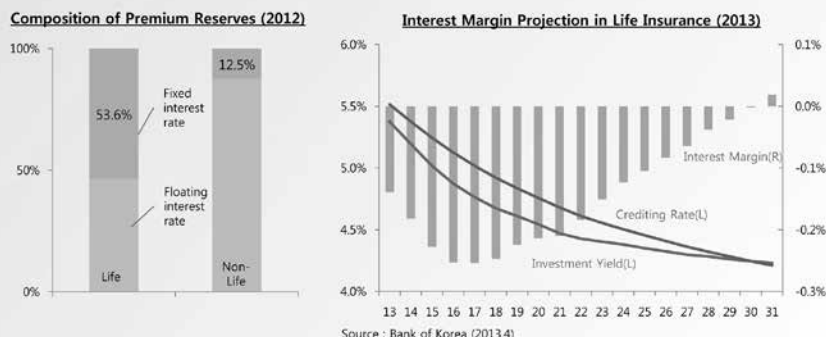
KIRI 보험연구원

シート 17

3.1.1. Fixed Crediting Rate



- ◆ Interest rates are fixed on the 53.6% of premium reserves in the life insurance industry as of the year 2012.
- It would take about 15 years for interest margins to turn positive.
- Interests on 87.5% of non-life premium reserves are credited with floating rates.



Source : Bank of Korea (2013.4)

18

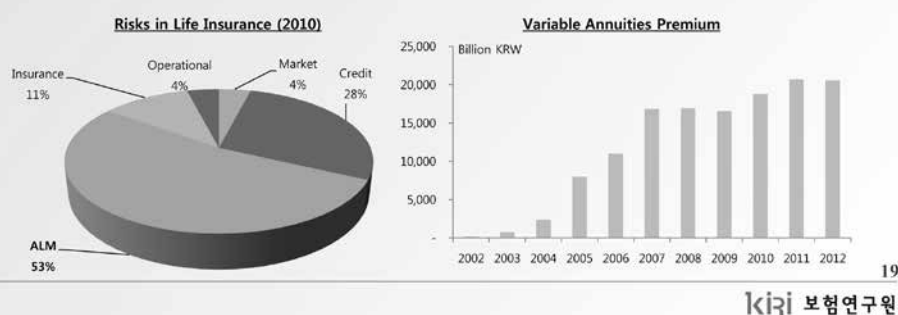
KIRI 보험연구원

シート 18

3.2. ALM Risk and Market Risk



- ◆ Insurance liabilities are more sensitive to the fluctuation of interest rates than insurers' assets are.
- For life insurers, the proportion of interest rate risk (i.e., asset-liability mismatching risk) in total capital requirements is 53.0%.
- In addition, the falling interest rates expose life insurers holding variable annuities with guaranteed minimum benefits to bigger market risk.

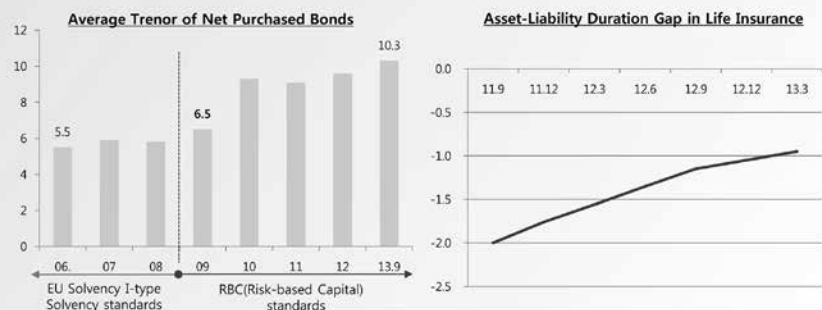


シート 19

3.2.1. Changes of Portfolios



- ◆ Insurers have responded by reducing the duration gap between assets and liabilities.
- The duration of assets increases as insurers hold more long-term assets.
- The lack of available long-term assets turns the insurers into focusing more on the change of product portfolio by selling floating interest rate products.



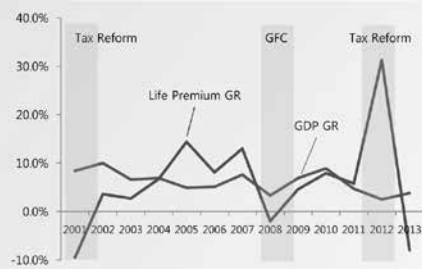
シート 20

3.3. Assuming More Risks

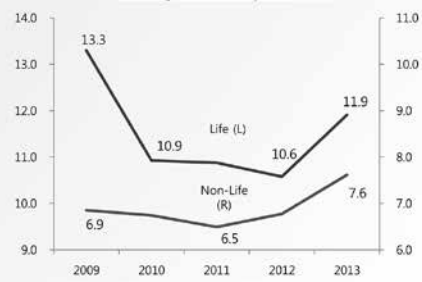


- ◆ It would be difficult for insurer to increase premium growth rate without changing current product portfolio.
- Premium growth rates would have followed economic growth rate without tax reforms.
- Low economic growth environments make insurers assume more risks than ever.

GDP Growth Rate and Life Premium Growth Rate



Leverage (Asset-Capital Ratio)



21

KIRI 보험연구원

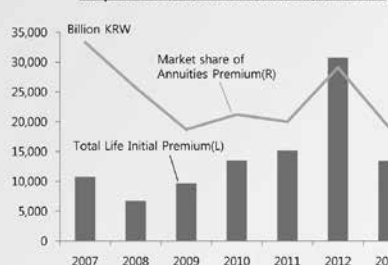
シート 21

3.3.1. Health and Income Protection

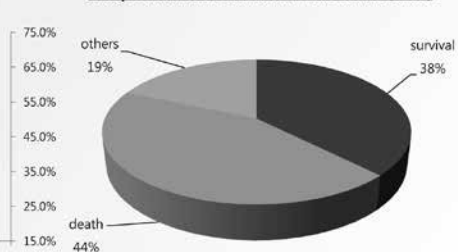


- ◆ Ageing people need more health and income protection.
- Insurers will be more exposed to longevity risks as annuities and pensions become dominant in the insurance market.
- In addition, insurers will face more insurance risks as older people become their main customer base.

Proportion of Annuities (incl. VA) Premium



Composition of Premium Reserves in Life (2012)



22

KIRI 보험연구원

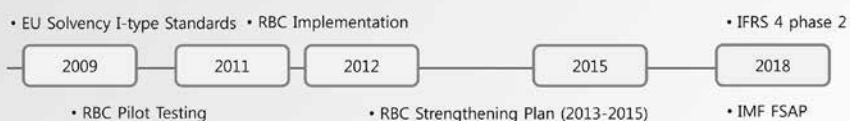
シート 22

3.4. Regulatory Uncertainty



◆ Financial supervisory authorities plan to strengthen solvency standards.

- The plan is being setup to prepare for FSAP and IFRS 4 phase 2 implementation in 2018.
- The details of the plan are not confirmed and preparation period is not sufficient.



◆ Concerns about potentially substantial 'trial and error' arise.

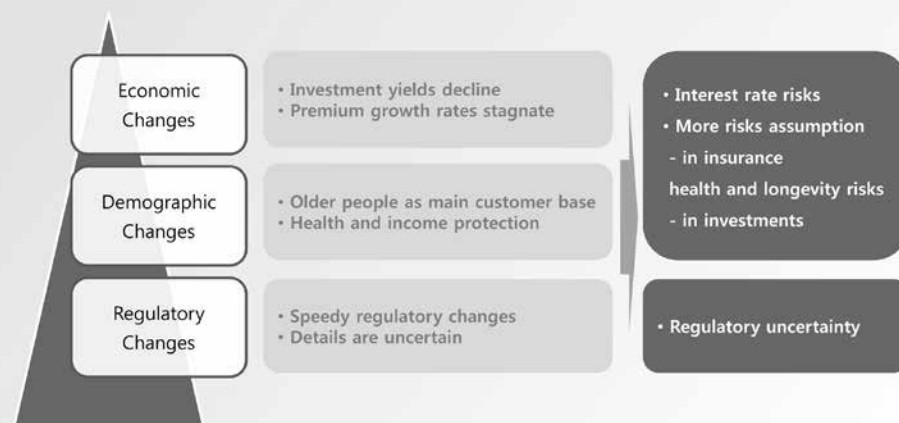
- A short preparation period makes it difficult for insurers to meet the strengthened capital and accounting standards.
- The perception of regulatory uncertainty restrains insurers' investments under the new plan, undermining the effectiveness of regulatory initiatives.

23

kiri 보험연구원

シート 23

3.5. Summary



24

kiri 보험연구원

シート 24



シート 25

4.1. Interest Rate Risk Management

- ◆ Insurers should reduce economic mismatch against interest rate risks.
 - Insurers have tried to hold more long term assets; however, the lack of domestic long-term assets makes insurers try to find alternative means.
 - Limits on risk-transfer using derivatives and financial reinsurance : high transaction costs and complex hedging accounting.
 - Insurers focus more on the change of their product portfolios rather than on that of their asset portfolios.
- ◆ For products with guaranteed minimum benefits or guaranteed minimum crediting rates, insurers have to manage interest rate risks in the environment of falling interest rates.
 - Guaranteed minimum interest rates for floating crediting rate products
 - Guaranteed minimum benefits for variable insurance products

26
KIRI 보험연구원

シート 26

4.2. Insurance Risk Management



◆ Building up infrastructure for the health insurance market

- It needs to standardize private health insurance services that are not included in the benefits provided by the National Health Insurance Service(NHIS).
- The allowance of medical service providers' claims for medical expenses and the need of information sharing between NHIS and insurers are at issue.

◆ Growing awareness of the needs to manage longevity risk

- Longevity risk is not significant in the Korean insurance industry; most annuities are in the early stage of accumulation and their persistency rates are not high.
- However, rapid mortality improvement and prevailing annuity conversion options in whole-life insurance make insurers more exposed to longevity risk.
- The mix of life and annuity risks is not likely to provide an optimal mortality hedge; as a result, risk sharing with capital market participants may be sought for.

27

kiri 보험연구원

シート 27

4.3. Response to Regulatory Changes



◆ RBC strengthening plan and IFRS 4 phase 2 are expected to promote the risk management in insurance.

◆ Their implementation may lead most insurers to struggle against the decline of their RBC ratios; however, these effects are not fully considered in the plan.

- The decline of RBC ratios may force insurers to reduce risks while they need to assume more risks under new environments.
- IFRS 4 phase 2 could make the reserves insurers hold fall short of their current values, leading to the reduction of their surplus.

◆ Insurers have to include regulatory uncertainty in their strategic planning.

- The details of the solvency roadmap are not established yet.

28

kiri 보험연구원

シート 28

4.3.1. Solvency Regulation Reform



◆ Solvency reform makes insurers more sensitive to risks and promotes their risk management.

- The reform should be designed to facilitate a smooth crossover to the new regime by providing insurers with time to modify and adapt their current practices.
- In addition, a variety of risk transfer solutions may need to be included in the reform.

Solvency Regulation Reform		
	Enhancing risk sensitivity	Promoting self-assessment
Pillar 1 (RBC)	<ul style="list-style-type: none"> • Risk ramification : e.g., longevity risk • Precise risk measurement • Raising the confidence level to 99% • Revising the coefficient of correlation 	<ul style="list-style-type: none"> • Internal models
Pillar 2 (supervisory review)	<ul style="list-style-type: none"> • Off-site risk monitoring • On-site examination 	<ul style="list-style-type: none"> • ORSA
Pillar 3 (market discipline)	<ul style="list-style-type: none"> • Disclosures 	<ul style="list-style-type: none"> • Disclosures

29

KIRI 보험연구원

シート 29

4.4. Enterprise Risk Management



◆ Risk and capital management are becoming more important to insurers.

- Insurers need to respond to future market uncertainties, as well as foreseen regulatory changes.
- Insurers have to make risk-based considerations at the forefront of business operations and decision making.

◆ Setting up risk-based pricing frameworks

- Risk monitoring and control over the entire business process

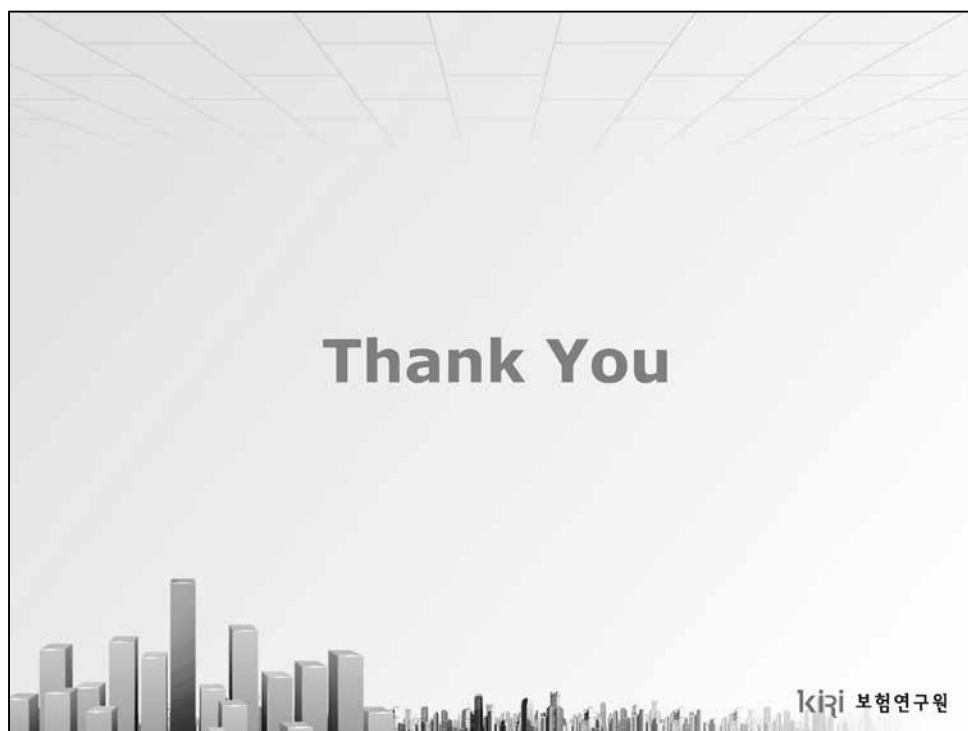
◆ The development of a strong risk management culture

- Moving away from tick-box exercise to the risk management improvement driven primarily by management vision not by the regulatory stick.

30

KIRI 보험연구원

シート 30



シート 31